

大阪歴史学入門講座（2016年7月24日）

「歴史学の可能性 potentiality を開くために」

福井憲彦（学習院大学文学部）

I はじめに：現在の世界の危機的状況と歴史学の歴史性

<現象的な危機的状況の例示>

- ・本格的産業化と化石燃料の使用がもたらした環境負荷
温暖化と生態系の破壊：CO₂ 排出量の増大（1960年40億t⇒現在90億t）：
⇒1万年前からの完新世（沖積世）という地球環境的好条件の人為的破壊？
- ・原子力「平和」利用と核兵器⇒未解決問題山積＝地球全体の壊滅への危険
- ・医療技術や遺伝子研究の急速な発展⇒生命倫理での合意形成の困難
- ・デジタル技術の驚異的な展開⇒その可能性とリスクに関する議論の貧困
- ・グローバル化のなかでの国民国家的「国益」追求抗争と格差拡大
⇒武力紛争や宗教的 fanaticism からのテロの拡大

<生じつつあるのは人間社会と自然（地球環境）との関係の根本的問題化>

- ・このまま人間の歴史の展開が方向を変えないとすると、人を含む多様な生命の微妙なバランスで成り立ってきた地球そのものの生命世界が壊滅という最悪のストーリーすらありうる：人間の知的前進がもたらす「可能性と危険性の入れ子状態」
- ・歴史学は現在の課題に直接答えようとするものではない（研究対象も個別的・局所的である）が、研究考察の社会的発信をすべき使命があるとすれば、研究の社会的メッセージ性と現在の位置に関する意識化は不可欠＝不可避的負荷としての「歴史性」

II 西洋近現代史の展開における両義的性格

<現在の諸課題につながる歴史的諸要素のうち根本的な2点から19世紀末に着目>

（II-1）21世紀の現状の前提をなした科学技術の驚異的発展の開始

- ① 19世紀、特にその世紀末以来の産業化の本格的開始と対応した sciences（科

学／学問) と technology (技術) の加速度的発展という状況からの連続性：現在に至る「知の地殻変動」の開始⇒社会にもたらされた可能性と危険性

- ・応用の現実化：理論や実験室から生産や生活の場へ (ex. 電気の事例)
- ・都市化の進展と都市型生活文化の拡大：消費文化の拡大普及 (大量消費型社会へ)
- ・他律的サービスネットワークへの依存拡大 (エキスパートの時代へ)
- ・移動や情報コミュニケーションの変化と加速化 (ex. 標準時の設定と普及) 等

② 人間と世界との関係を捉える「ものの見方」(認識枠組) が多様で異質な分野で同時多発的に変化への胎動を始めた時代＝19世紀末からの世紀転換期：変化を象徴したのが「見えないものを見る」態度とその可能性：その事例

・心理学や精神分析の台頭、細菌学の確立進歩と近代医学と医療の変化、原子核物理学の成立、等

・芸術表現における変化＝写實的再現からの離陸と、他方での「複製技術時代における芸術」という時代の開始

・他方で、近代化過程における社会変化や物質主義に対する違和感や反発の表出＝神秘主義、オカルトなどへの傾斜や伝統回帰の主張、カリスマ的英雄待望論、等

③ サイエンス (科学／学問) は価値中立ではなかった＝規範形成への関与

事例：医学や衛生学と近代的社會規範や行動規範；学問と政治 (地理学と植民地支配；地質学調査と資源開発)；人類学／社会学と優劣意識 (primitive society or ancient society という対象化)；優生学 eugenics や人種論 racism、社会進化論 social Darwinism などの「似非科学」の横行

④ サイエンスの進歩と重大な二つの無理解

①文化の多様性や未知の文化社会への無理解：mission for civilization や moral conquest という発想の基底に存在 (ヨーロッパ中心主義 Euro-centrism 自文化中心主義 ego-centrism に立つ「進歩史観」)

②本格的工業化以後の兵器の破壊力への無理解＝戦争の質的变化への無理解⇒第一次世界大戦 (欧州大戦) の衝撃：甚大な人的被害と総力戦体制という経験

(II-2) 国家政治システムの変容 : nation-state system の成立 ⇒現在に向けて拡大 (20 世紀後半こそ「国民国家の時代」) ; <現在の危機対応に有効性を持つか? >

① 産業社会が求める内的同一性 integrity=identity の追求 (国内市場の一体的整備 ; 言語や価値規範/行動様式等の斉一化 uniformization の政治)

・しかし現実には、内部の多様性は払拭しがたく存在=言語や生活様式における地域的特性 (過去からの存続=伝統性/フォークロアの対象とされた存在様式) と、経済社会の変動に伴う新たな多様性 (移民の流出入) : 多様性といかに向き合うかという課題⇒ブリテン型の「礫岩的」統合 conglomerate integration への志向とフランス共和政型の普遍的同化 universal assimilation への志向 (まさに現在的問題へ)

② 国民化の政治

・国民国家の実質化と合意調達という要請=普通選挙制の普及と拡大 (まだ女性は排除されていた=それがフェミニズムの主張を促す) ⇒大衆政治 mass politics の時代へ=従来の社会関係資本 social capitals にもとづく地域名望家 notables に依拠した政治支配の終焉⇒「伝統回帰」を主張する保守派の反発 ; 「群集心理」の問題化

・共和政体にせよ立憲君主制にせよ、憲法のもと、選挙による議会を基盤とした法治国家体制が成立できた国=統合性の高い国民国家の優位 ; その成立にはそれぞれの国家によって、長期にわたる前史的な過程があった (初期近代のあり方の重要な関わり) ; その過程における「知識人」による言説=政治社会思想の重要性

③ 19 世紀末からの政治経済の変化加速化=動きの拡大に対応した「組織化」「制度化」が進行する時代=大衆動員 mass mobilization が展開する時代へ : 大衆=労働力として、消費者として、兵力として、一票の保持者として

④ 国民国家体制と帝国主義的対外進出 (植民地獲得) 競争

・19 世紀末の経済大不況を乗り越えるための構造改革と覇権抗争 : 連衡合従的な同盟関係の追求と一国利益 (国益) の追求

・19 世紀末から生じた、内部と外部とを峻別する原則に立つ国民国家 nation-state の実質化過程と帝国主義 imperialism 的内外政策の展開という同時代現象

Ⅲ 近代歴史学の進歩主義的国民（国家）史 national history としての成立と、それへの批判

(Ⅲ-1) 近代歴史学自体、(Ⅱ-2) のような政治社会をめぐる時代性において、(Ⅱ-1) のような学問（科学）技術が急速に発展し始めるなかで制度的に確立：欧米諸国と日本とで、それほど時間的落差があったわけではない（いずれも 19 世紀末で共通；ただし前史的な条件は当然ながら異なっていた）

<共通する特徴>

・ヨーロッパ中心主義的歴史観＝近代化を先導したヨーロッパの優位性・先進性を前提とする進歩史観という特徴：Euro-centrism：近代主義的なものとマルクス主義的なものと、それぞれに定向進化論的な特徴を帯びて、national history として定立していく（分野の専門分化が生じるなかで、国家政治史または国民経済史を中心に）

・制度化された歴史学が担った、国民国家の構成員に国民としてのアイデンティティを用意する national history としての役割：歴史的共同性の強調と国民国家の政治的実体化に積極的に関与：国民への歴史教育

⇒これらに対するリアクションもまた同時代から多様に登場していた（主に在野で）

・アーカイブズ Archives の整理公開原則の発展：史料保存や史料批判の進歩

(Ⅲ-2) 日本における近代歴史学と戦後歴史学

・明治維新という政治革命の正当化；近代天皇像の創出と富国強兵路線による国民国家の定置＝定向進化論的な national history の枠組み受容：近代化過程のモデルを西洋世界（諸国）に見る＝日本という国家枠組の「自明性」の共有化

・戦後歴史学もまた、敗戦までの日本社会の後進性批判と「皇国史観」否定から出発したが、national and progressive history という認識枠組から自由ではなかった

・戦後歴史学批判の展開＝1960 年代から多様に展開しはじめ 70 年代後半から加速（同時代状況＝「戦後復興と経済高度成長」との関係：Ⅳへ）

<⇒日本における近代歴史学の批判的対象化は、敗戦を挟んで 1 世紀に及ぶ世界のなかでの近代日本の歴史的文脈、国民国家としての諸制度構築と近代化過程という全体的な歴史性のなかに位置づけて捉えなければならない>（歴史学研究会編『戦後歴史学再考』2000 年、三浦信孝編『戦後思想の光と影』2016 年、など参照）

IV ナショナル・ヒストリーとその集積という近代歴史学から「離陸」するには

(IV-1) 歴史研究におけるタブーの消滅＝決定論的な支配的言説への疑義、通説的歴史観の否定＝問題意識の多様性尊重と相対化:何より歴史を問う者の「問題意識」**problematic** の重視⇒「個別」と「全体」とのダイナミクスを問わない個別性への拡散、という危険も存在⇒「問題構成」の重要性（日本では1970年代半ばから特に1980年代以降「歴史学の見直し」という動きが活性化；「社会史ブーム」＝同時期を境目とする「世界の戦後体制」の転換開始と対応？1989年というもう一つの転換点：社会経済的な決定要因→文化的な諸要因の重視へ＝「言語論的転回」の一側面と関係？（「社会階級意識論」や「近代的人間類型論」といった論理組み立てからの逆転）

(IV-2) 「表象としての歴史学」：単純な実体論の否定＝歴史学に限られたことではない、人間による現実認識（解釈）とその表象（人文社会系学問は多く言語表象）のあり方全般に関わる。ただし歴史学の場合には対象との時間的な距離関係が、現在を対象とする学問とは異なる点が特徴＝問題設定及び史資料の重要性

(IV-3) 認識における多様な枠組の設定：人におけるアイデンティティは単一ではない＝国家という帰属枠組（それ自体は歴史的に否定できないもの）の相対化（**one of them**）；例えば、変化を主導した支配原理とは異なる日常性からの問いの構築＝「下からの歴史」**history from below** はほぼ1960年代から欧米諸国で（ex.民衆文化、民間信仰、家族、職業的社団、街区共同体、社会運動、周縁的存在などの問題化として）：同時期に日本でも色川大吉らによる「民衆史」や安丸良夫らによる「通俗道徳」や「民衆思想」の問題化として動いていた⇒＜「先進」工業諸国における第2次大戦後の同時代性と差異に注目＞

(IV-4) 多様な空間的枠組の設定による歴史解釈・認識の相対化＝**local, regional, national, trans-national, global** といった枠組設定による問題の脈絡関係への問い（**national** に代えて **global** 等の枠組を実体化することではない）；社会経済的な活動や文化の歴史的構築、あるいは政治的諸関係等におけるこれらの多様な枠組間の **trans-border** な脈絡や比較対照＝対象とする問題の同時代状況における全体的位置づけという問題構成の仮設（人は個であると同時に社会的存在であり類的存在でもあるという根本的な存在様式に由来する考察様式の重層化）

⇒近代歴史学という学問形成展開に関する史学史的探究が、**local** から **national** を経

て global に至る相互関係と比較対照を踏まえた歴史性を問う形でなされる一種の intellectual history としてさらに求められているのではないか (cf. 長谷川貴彦『現代歴史学への展望～言語論的転回を超えて』2016年)

・歴史の定向進化論的な前提を外す⇒個別問題の探究から発して歴史的展開を解釈し記述するさいの基本的認識態度として何が問われるのか：問いの global perspective (context)のなかへの位置づけと比較考察 comparison；英米歴史学でいわれている conjuncture (フランス語でいう conjoncture)=「局面状況」、「多様な状況の複合」の明確化；定向進化の否定=展開の必然性は問えない⇒contingency (accident)=「偶然性」「偶発性」の重視ということで良いのかどうか、問いは開かれたまま

V おわりに

・歴史学が対象とする問題の種別性の多さ=タブーの消滅と問題化の多様な可能性：空間的枠組の多様化と並んで時間的枠組の多様化(短/中/長/超長)、分野的(分節的)多様化を踏まえた問題構成の構築：個別問題と全体性との関係への問い(脱中心化した認識)＝史料状況が許す限り対象は膨大⇒史資料をめぐる状況の重要性

・研究成果の記述としての呈示：歴史的・社会的存在としての歴史研究者自身についての歴史学的・知識社会学的問い(ego-histoire)と、(社会的還元思想は拒否する)知(言説)の「相対的自律性」を踏まえた史学史上の自己の立場の検証

* 歴史学になしうること、すべきことは膨大に現存する

最後に、今年2016年4月に逝去された安丸良夫氏による二つの言を引いておきたい(いずれも『現代日本思想論～歴史意識とイデオロギー』岩波現代文庫に所収)

*「歴史学は、所詮は後知恵的説明しかなしえない学問だが、後知恵的認識は、これまでは見落されていたり、必ずしも自覚されていなかったりするべつの視角や論点を組み込んで、改めて考え直すということを意味している。それは迂遠に見えて、私たちの現在に近づくひとつの重要な手続きだと考える」(「20世紀日本をどうとらえるか」2002年)

*「歴史学的な知は、世界の秘密をいっきょに解き明かす黙示録的なものではないが、私たちの生きることの意味についてゆっくりと媒介的に考えさせてくれる鏡たりうるものだ、と私は思う」(「表象と意味の歴史学」2002年)